

平成27年3月9日(月)

老球の細道125号

本物はさりげなくキラリと光る

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

第2次世界大戦時ナチスドイツの収容所の生活を描いた『夜と霧』の著者ウイクトール・フランクル博士の話である。

「ナチスドイツによりフランクル自身も妻とともに、今まで持っていた財産すべてを没収され、強制収容所に送られた。収容所の中は、多くの人々が生き残ることだけに意識を集中し、そのために暴力、盗み、仲間を売るなどという良心のかけらもないような行為、エゴむき出しの行為が日常茶飯事で行われていた。しかし、フランクルや少数の人々は、そうした極限状態にあっても、他人に対して優しい言葉をかけ、当人にとって生きるためのかけがえのないパンの一切を与えた。このことは、どんなに過酷な運命がその人に与えられても、人間はその運命に対してどのような態度をとるかという意志の自由が与えられ、人間自身が高貴な存在であることを自らの体験を通して証明をした。

人間が人生の意味は何かと問う前に、人生のほう人間に対して問いを發してきている。だから人間は、本当は生きる意味を問い求める必要などないのである。人間は、人生から問われている存在である。人間は、生きる意味を求めて問いを發するのではなく、人生からの問いに答えなくてはならない。そして、その答えは、それぞれの人生からの具体的な問いかけに対する具体的な答えでなくてはならない」(『死と愛』みすず書房より)

今年ももうすぐ「3・11東日本大震災の日」がやってくる。あれから4年が経過し、今だに先の見えない状況が続く。当時私が勤務していた葵高校でも避難所が設営され、体育館の中に多い時は600人が避難生活を送っていた。当時先の見えない葵高校での避難所においても崇高な情景を数多く見る事ができた。

避難所には徐々に支援物資が毎日のように集まってきた。特に衣類関係は置く場所もないくらいの量が集まった。分別する余裕も人手もなかったので、空いているスペースに重ねて置き、必要な人たちがそこから自由に持って行くようになっていた。

数日後、あんなに乱雑に置かれていた衣類がデパートの売り場のように、階段状に綺麗に整理整頓されているのに気がついた。誰がやっているのかわからなかったが、ある日、その秘密を発見した。ある一人のおばさんが必要な衣類を探す風を装って、誰にも気づかずに衣類の整理整頓をやっていたのである。自分の必要な衣類はさておき、避難所にいるみんなのために見やすく、取りやすくするために。

物の不足している局面に遭遇すると、我先に物資をあさり取ろうとするのが人間の本性かもしれないが、そういう人ばかりではなかった。避難所という先が見えにくい環境の中に置いても、自分のことよりみんなのことを考えて冷静に行動できる人たちがいた。

このおばさんは別な面においても際だっていた。私が毎日の連絡事項をマイクでアナウンスをするとき、必ず身体をむき直して正座をし、一言一言に相槌を入れながら聞いていた。このような姿勢で話を聞いてくれる生徒がたくさんいたら、世の中の教師達はどれほど授業に燃えることだろうと当時思った。

逆境の立場にありながら、誠心誠意他人の話に耳を傾け、自分のことよりも皆のために人知れず、さりげなく行動する本物の人間はキラリと光る。今どうしているだろう。